10年間の皮膚悪性新生物

藤田保健衛生大学病院皮膚科における
過去10年間の皮膚悪性新生物のまとめ

杉浦 啓二^{*1} 小出江理香^{*1} 陳 友一^{*1} 清水 善徳^{*1}
松永佳世子^{*1} 上田 宏^{*1} 梅村 芳樹^{*2}

Summary

We reported a total of 229 cases of malignant skin tumors that were pathologically diagnosed at the Department of Dermatology, Fujita Health University Hospital between January 1989 and June 1998. The incidence of malignant skin tumors was 0.73% of 31,379 new patients during the period. The male versus female ratio was 1.17 : 1. The commonest malignant skin tumors were squamous cell carcinomas (SCC) and which showed an increasing trend. The basal cell carcinomas (BCC) versus SCC ratio were 0.91, which resembled that of western Japan. We experienced 8 angiosarcomas. Among them 3 are alive during this period. They are all male patients who have been treated with interleukin 2.

Key words : Malignant skin tumors, Statistical study

はじめに

本邦での皮膚悪性新生物の発生率は欧米人に比し少ないが、近年高齢化社会にともない増加傾向にある¹⁾²⁾。今回、当科においてもその発生率の推移を検討するため、過去10年間に病理組織学的に診断し得た皮膚悪性新生物についてまとめ、興味ある結果を得たので、文献的考察を加え検討した。

対 象 : 対象は1989年1月より1998年6月までに当科を受診した男性17,258名、女性14,121名のうち病理組織学的に皮膚悪性新生物と診断した11歳～94歳(平均65.2歳)の229

例。対象疾患は表皮系が基底細胞癌(BCC)、扁平上皮癌(SCC)、色素細胞系が悪性黒色腫(MM)、乳房外パジェット病(Em Paget病)、間葉系が悪性線維性組織球腫(MFH)、血管肉腫(Angiosarcoma)、網内系が成人T細胞白血病(ATL)、急性リンパ性白血病(ALL)、急性骨髄性白血病(AML)、慢性リンパ性白血病(CLL)、慢性骨髄性白血病(CML)、菌状息肉症(MF)、悪性リンパ腫(ML)、転移性皮膚腫瘍を対象とし、Bowen病、日光角化症は除いた。なお1個人に異なった腫瘍を認めた場合2種とした。

結 果

1. 頻度

1) 男女比

229例のうち男性124名(54%)、女性105名(46%)で男性に多く認めた。男女比は1.17:1で

^{*1} Keiji SUGIURA, Erika KOIDE, Yuichi CHIN, Yoshinori SHIMIZU, Kayoko MATSUNAGA, Hiroshi UEDA : 藤田保健衛生大学病院皮膚科

^{*2} Yoshiki UMEMURA : 新城市民病院皮膚科

あった。疾患別では表皮系、色素細胞系、間葉系、網内系で男性に多く認められ、Em Paget 病は女性に多く、転移性皮膚腫瘍は男女同数であった。

2) 年齢別症例数

年齢別腫瘍数では60歳代、70歳代の高齢者に多く認められた(図1)。最小年齢は11歳のCTCLで、最高年齢は94歳のSCCであった。

3) 総新患者に対する頻度

過去10年間の総新患者数に対する皮膚悪性新生物の比率を検討したところ0.73%を占め、前期5年間と後期5年間を比較したところ症例数だけでなく、総新患者数に対する比率も0.53%から0.96%と後期5年間に増加傾向を認めた(図2)。

図1. 過去10年間の年齢別腫瘍数

4) 疾患別頻度

過去10年間の疾患別頻度ではSCCが最も多かった(図3)。また過去10年間の総新患者数に対する各腫瘍別の比率で、前期5年間と後期5年間で比較したところ明らかに比率の上昇を認めるのはSCCであった(図4)。

2. 表皮系腫瘍

1) SCC

SCCの年齢別性差をみると男性では70歳代にピークがあるが、女性では加齢とともにSCCの数の増加を認め、80歳代にピークがあった(図5)。部位については顔面が多く、露光部は約80%を占めた。

2) BCC

BCCの年齢別性差では大差なく、男女ともに

図2. 過去10年間の男女別前後期別症例数

図3. 過去10年間の前後期別腫瘍数

図4. 過去10年間の総新患者に対する各疾患別の前後期別比率

図5. 過去10年間のSCCの年齢別症例数

図6. 過去10年間のBCCの年齢別症例数

平均年齢は67歳であった(図6)。部位について顔面が75.5%と最も多かった。

3) BCC/SCC ratio

BCC/SCC ratioは0.91であった。

3. 色素細胞系腫瘍(表1)

MMは過去10年間で19例あり男女比では男性に多く、平均年齢は男女ともに59.7歳と他の疾患より若かった。またUICCのTNM分類によるstage分類ではstage Iが7例と最も多かった。また発生部位では足底が6例と最も多かった。

4. Em Paget 病

Em Paget 病は過去10年間に12例あり男女比は1:1.4と女性に多く、また12例のうち1例はdouble Paget 病(外陰, 腋)で、さらに稀な1例として著者らが報告⁴⁾している腎移植後のEm Paget 病も経験した。

5. 間葉系腫瘍(表2)

Angiosarcomaは過去10年間で8例と比較的多数の症例があり、全ての症例が60歳以上であった。臨床病型では結節型が多く、部位では頭部が最多であった。生存例については全て男性で、interleukin 2 (IL-2) を使用しており、うち斑状型の1例はIL-2動注例で他2例は結節型で局注例であった。またMFHは10年間で3例経験し、現在全て生存している。また比較的稀な部位として左頬部の症例があった。

6. 網内系腫瘍

疾患別では、ATLが8例で最も多く、男女比では1.38:1で男性に多かった。年齢ではCTCLの11歳の症例が最年少であった。

7. 転移性皮膚腫瘍

原発組織では肺癌が最も多く、次いで乳癌を多く認めた。肺癌の組織型では3例が腺癌で2例が扁平上皮癌であった。

表1. 過去10年間のMMの症例一覧

病期	年齢	性別	生存期間	転帰
1	60	男	不明	不明
	63	男	不明	不明
	48	男	2年2ヶ月	生存
	42	男	3年7ヶ月	生存
	58	女	7年3ヶ月	生存
	58	男	7年8ヶ月	生存
	64	女	10年	生存
2	63	男	不明	不明
	71	女	10ヶ月	死亡
	61	女	4年1ヶ月	死亡
	63	男	4年8ヶ月	生存
	55	男	7年6ヶ月	生存
3	64	男	5ヶ月	生存
	54	女	1年1ヶ月	生存
	52	男	1年5ヶ月	生存
	47	女	1年10ヶ月	死亡
	75	男	3年	生存
4	60	女	1年6ヶ月	死亡

表2. 過去10年間のAngiosarcomaの一覧

年齢	性別	部位	臨床病型	治療	生存期間	予後
60*	女	右鼠径	結節型	手術	不明	死亡
71	女	右臀部	結節型	手術、化学療法	3ヶ月	死亡
64	男	下腿	斑状型	IL-2	4ヶ月	死亡
62	男	左頬部	斑状型	手術、化学療法、IL-2、電子線	2年	死亡
75	女	頭部	結節型	IL-2、電子線	3年	死亡
69	男	頭部	結節型	手術、IL-2、電子線	3ヶ月	生存
71	男	頭部	斑状型	手術、IL-2、電子線	2年	生存
72	男	頭部	結節型	IL-2、電子線	3年	生存

*Stewart-Treves症候群

考 案

当科10年間で経験した皮膚悪性新生物229例につき報告した。男女比では男性124例、女性105例（男：女＝1.17：1）と顕著な差はなく、九州大⁵⁾、山口大⁶⁾の報告と同様に明らかな男女差は認められていない。外来総新患者に対する皮膚悪性新生物の割合は0.73%で、他施設の報告^{5)~7)}と比し高い方であった。その理由の1つは大学病院であり悪性新生物患者の受診が多いためと思われる。また前期、後期5カ年の比較では後期5年間の方が腫瘍数、総新患者に対する比率も増加しており、その原因として高齢者人口の増加、医療医学の普及、皮膚疾患に対する認識の向上、生活習慣の欧米化などが挙げられる。

1. 表皮系腫瘍

菊池ら⁷⁾、上田ら⁸⁾、Tadaら⁹⁾の報告と異なり、BCCを抜きSCCが当科では最も多かった。この点について明らかな原因は不明だが、SCCの患者の職業に農業、建設業が多い傾向があり、紫外線暴露時間が長くそれによるActinic keratosisが基礎にあるためと思われる。BCC、SCCの年齢構成として、BCCでは当科清水ら¹⁰⁾が報告している19歳の基礎疾患のない稀な症例が最小年齢であった。SCCではとくに女性において年齢を経るごとにその数が増加し80歳代がピークで、男性では70歳代がピークでその後減少している。このことは女性の寿命が男性よりも長いことが起因していると思われた。村山ら³⁾が報告しているBCC/SCC ratioは人種差、地域差があるといわれているが、当科では10年間の平均が0.91と西日本のものと近似していた。これは当科ではSCCが多いためと考えられる。

2. 色素細胞系腫瘍

発症年齢は60歳以降に、発症部位では足底に多いという点は現在までの報告^{11)~13)}と一致している。生存期間についてはstage I、IIは

stage III、IVよりも長い傾向があるが、この点についてはさらに症例を積み重ねていく必要がある。なお、今回の統計には入っていないが、当科で経験した最長生存期間のMMは12年生存した女性例であった。

3. Em Paget病

当科での男女比は1:1.4と女性に多く、これまでの報告^{14) 15)}とは異なっていた。これは症例数が少ないことも起因していると考えられるので、さらに症例を積み重ねる必要がある。

4. 間葉系腫瘍

AngiosarcomaのIL-2使用例は8例中6例であった。最長生存期間は36ヵ月で平均生存期間は21ヵ月であった。IL-2、電子線併用例はIL-2単独使用例、IL-2不使用例よりも生存期間が長い傾向があり、併用した方が治療効果が高い可能性がある。

5. 網内系腫瘍

今回の検討では男女共に平均年齢が50歳代と比較的若い結果を得た。これは当院が大学病院であり血液化学療法科があるためと思われる。

6. 転移性皮膚腫瘍

転移性皮膚腫瘍は原発巣の進行した状態であることがほとんどで、その頻度は皮膚癌性腫瘍の約6%といわれている¹⁶⁾。Brownstein & Helwig¹⁷⁾による分類では結節型が11例と最も多かった。

本邦では乳癌＞胃癌＞肺癌の順に多いといわれているが、我々の統計では肺癌が多く胃癌は認めなかった。肺癌が多いことに関しては近年の肺癌の増加が影響しているものと思われる。年齢では女性が57.8歳、男性が65歳とはほぼ癌年齢に一致していた。女性が若いことは福井ら¹⁸⁾、龍崎ら¹⁹⁾の報告と同様で、これは乳癌の症例が多いこと、そして乳癌の発症年齢が他の疾患より若いことがあげられる。また発症部位で胸部が多いのは原発巣の被覆部位であり、また頭部、顔面に多いのは血流が豊富なためと考えられた。

最後に、以上当科における過去10年間の皮膚悪性新生物のまとめを報告したが、今後さらに症例を増やし、各々の疾患について検討していきたい。

文 献

- 1) 梅田整, 飯田秀夫, 青木一浩, 他: 東京医科歯科大学皮膚科における過去6年間の皮膚悪性腫瘍の統計. *Skin Cancer*, 8:126-130, 1993.
- 2) 高橋泰英: 横浜市立大学医学部皮膚科における上皮系悪性腫瘍の統計的観察. *Skin Cancer*, 6:460-467, 1991.
- 3) 村上功子, 阿部澄乃, 吉池高志, 他: 順天堂大学浦安病院における過去10年間の皮膚悪性腫瘍の統計. *Skin Cancer*, 12:96-103, 1997.
- 4) 杉浦啓二, 陳友一, 鈴木加余子, 他: 腎移植後に生じた乳房外Paget病の1例. *皮膚*, 40:379-383, 1998.
- 5) 今山修平, 永江祥之介: 九大皮膚科75年間の悪性腫瘍の統計. *西日皮膚*, 43:974-983, 1981.
- 6) 山口康則, 麻上千鳥, 浪花志郎, 他: 最近20年間における皮膚悪性腫瘍教室例の検討. *西日皮膚*, 46(増):107-109, 1984.
- 7) 菊池新, 清水宏, 原田敬之, 他: 慶大皮膚科における過去22年間の皮膚悪性腫瘍の統計. *日皮会誌*, 103:1743-1746, 1993.
- 8) 上田英一郎, 岸本三郎, 安野洋一: 京都府立大学皮膚科における最近10年間の皮膚悪性腫瘍の統計的観察. *臨皮*, 50:961-966, 1996.
- 9) Tada, M., Miki, Y.: Malignant skin tumors among dermatology patients in university hospitals of Japan; *J. Dermatol.* 11:313-321, 1984.
- 10) 清水善徳, 安部誠, 増谷衛, 他: 若年者に発生した基底細胞上皮腫の1例. *皮膚臨床*, 35:533-536, 1993.
- 11) 勝海薫, 島田稚, 島垣和花, 他: 1976年から1990年までの15年間の新潟大学皮膚科における悪性黒色腫症例の統計的考察. *Skin Cancer*, 8:93-97, 1993.
- 12) 梅林芳弘, 大塚藤男: 筑波大学皮膚科における悪性黒色腫の統計的観察ならびに予後に関する検討. *Skin Cancer*, 8:55-61, 1993.
- 13) 内田寛: 最近20年間における悪性黒色腫教室例の臨床的, 統計的観察. *西日皮膚*, 46(増):129-135, 1984.
- 14) 小山田亮, 神谷秀喜, 北島康雄: 岐阜大学皮膚科におけるPaget病47例の統計的考察ならびに治療と予後についての検討. *西日皮膚*, 57:1053-1058, 1995.
- 15) 大原國章, 大西泰彦, 川端康浩: 乳房外Paget病の診断と治療. *Skin Cancer*, 8(special issue):187-208, 1993.
- 16) 池田重雄, 濱松輝美: 腫瘍. 診断と治療, 49:2124-2131, 1974.
- 17) Brownstein, M. H., Helwig, E. B.: Patterns of cutaneous metastasis. *Arch Dermatol*, 105:862-868, 1972.
- 18) 福井佳子, 徐信夫, 前島精治, 他: 転移性皮膚癌32症例の統計学的観察. *皮膚*, 37:534-543, 1995.
- 19) 龍崎圭一郎, 田村敦志, 永井弥生, 他: 群馬大学皮膚科における転移性皮膚癌の臨床的検討. *臨皮*, 51:500-503, 1997.